

明治・大正・昭和前期とされる紅絹布の染料同定について
共立女大 伊藤園枝、桂木奈巳、酒井哲也、河村まち子

明治期から昭和前期にかけて、我が国は大きな社会的変革を経験した。繊維の世界に限ってみても、製布や染色における伝統的技法とヨーロッパから移入された技法とが並存、競合し、これらに伴って産業形態の並存、競合が行われたのである。したがって、染料についても、伝統的な天然染料と化学染料とが適宜用いられていたと考えられるから、本研究の対象である和装裏地として用いられた紅絹布において、それらがどのように使い分けられていたかを知ることは、非常に興味あることと言えよう。また、染料が同定されれば、当時の色彩の趣向を考察したり、その染料の劣化状態などをシミュレーションすることにより、時代鑑定や保存状態に有力な情報を提供しうるものと考えられる。

すなわち、本研究では、実用的に簡便なペーパークロマトグラフィを分析方法として採用し、まず、現在入手可能な赤色系染料の範囲で染料の同定を可能にすることを目的とした。その結果、一定の同定手順を確立し、天然染料の使用は予想外に少なく、また、多くの試料において、少なくとも赤色系と橙色系の複数染料で染められていること、などを明らかにした。